

平成 25 年 1 2 月 2 3 日

式年遷宮と日本文化の特徴

宮城県議会議員 相沢 光哉

相沢光哉県議は、平成 25 年 10 月 5 日、伊勢神宮外宮の「遷御の儀」に奉拝者の 1 人として参列させて頂きました。そのことから感想文としてまとめてみたのが「式年遷宮と日本文化の特徴」です。どうかご一読ください。

動よりは静、明よりは暗の「遷御の儀」

さる 10 月 5 日、伊勢神宮(外宮)の「遷御の儀(せんぎよのぎ)」に、奉拝者として参列いたしました。

式年遷宮は、遠く天武天皇(在 673~686)の発意により始められ、続く持統天皇(在 690~697)が第一回の式年遷宮を行われて以来、ほぼ二十年に一度、神の宮と調度品の全てを正確に作り直して、千三百年の時を超え、創建当初の姿を今日に伝えてきました。世界に類例のない、また日本人以外では考えもつかない希有の仕組みであり、行為でありましょう。

実際に、森閑とした暗闇の中で、旧いお宮から新しいお宮へ、神様がお移りになる厳粛な神事がしめやかに進められます。時折微かな物音が、時折神官らの抑制された動きが、有るや無しやのそこはかとした気配として伝わり、約三千人の奉拝者一人ひとりが、固唾を呑みながら、歴史的時間の経過に立ち会わせていただきました。

この体験から改めて感じたことは、式年遷宮が、まさしく日本文化の神髄であり、ご皇室を中心とした日本精神の精華と呼ぶにふさわしい事象だということです。また、わが国の歴史と伝統が、山、森、川や風、大気といった自然の息吹の中に溶け込み、共生、共存しているという実感です。

それは、こう考えていただければお分かりになると思います。もし、日本以外で、このような国を挙げての重要で壮大な儀式を行うとしたら、必ずや明る

い日中の時間に、絢爛豪華な建物で、盛大な催しという形になるに違いありません。遷御の儀は、動よりは静、明よりは暗の時間と空間を尊び、後世の茶道や俳諧の侘（わ）び、寂（さび）、能の幽玄に繋がる精神文化が感じられます。

日本人の自然観と式年遷宮

また、私たち日本人は自然というとき、厳しい砂漠の乾燥した環境や、北極圏の極寒の地を意識しません。あくまでも日本人の自然観は、四囲を海で囲まれ、亜寒帯 温帯 亜熱帯に長く延びた日本列島の自然環境、言いかえれば四季の繰り返し明瞭で、概ね温暖で暮らしやすく、海の幸 山の幸に恵まれているが、台風や地震の自然災害が多いという地理的条件を前提に、自然を感じます。

このことは、世界の人びとに自然を語るとき、いささか普遍性を欠くかもしれません。しかし、もともとどの国でも、歴史と文化ないし文明は、その国の自然環境や地理的条件を切り離しては存在しません。要は、それらの熟成された個性や価値観が、世界標準のレベルで、どれほどのインパクトを持つのかという評価で、然るべき地位におさまるのだと思います。

伊勢神宮は、その意味で、自然と共生、共存する日本の歴史と文化の代表にふさわしい存在であり、世界の中でも最高級の称賛と敬愛を受ける対象であることは疑いありません。

漂泊の歌人西行法師が伊勢神宮を訪れたとき、「何ごとの おわしますかは知らねども かたじけなさに 涙こぼるる」という有名な和歌を残しています。また、俳聖松尾芭蕉はやはり神宮を訪れたとき、「何の木の 花とは知らず にほひかな」という味わいの深い俳句を詠じています。この二句に共通するシチュエーションは、対象物が明瞭ではないが、どこか厳かな、奥ゆかしい感じのものがあるという点です。判っていても、はっきり言わないというのは、日本人の所作言動によく表れる現象です。

伊勢神宮の生い立ちと戦前戦後の違い

伊勢神宮は、皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）を両正宮とする合計百二十五社の集合体です。内宮（ないくう）は天皇家の皇祖神である天照大神（あまてらすおおみかみ）をおまつりし、外宮（げくう）は高天原で天照大神を補

佐した豊受大神（とようけのおおみかみ）をおまつりしています。日本書紀には、初代神武天皇と同じ「御肇国天皇（はつくにしらすすめらみこと）」と称えられた第10代崇神天皇（在前97～前30）が、それまで皇居内におまつりしていた天照大神を、皇居外の相応しい土地におまつりすることを決意され、その思いは次代の垂仁天皇（在前29～70）の御世に、天皇の命を受け、国内各地の適地を探し求めていた倭姫命（やまとひめのみこと）に天照大神の御神託が下され、伊勢の地に定められたと伝えられています。

このように、天照大神や天孫降臨などの神話の世界にまで遡れる天皇家と伊勢神宮は、格別の御繋がりがあり、近年、歴代天皇は御即位に際して必ず神宮に謁せられます。しかし、式年遷宮に関しては、今上天皇は遷御の儀に勅使を派遣され、陛下御自身は皇居で御選擇をなされます。また、今回、ご皇族を代表して秋篠宮殿下がご参列されました。

ここで僭越ながら私見をはさむと、本来、式年遷宮は、ご皇室の祭祀として大変重要な対象であるにもかかわらず、宮中儀式と一線を画すかたちに止まっているのは、戦後日本の立ち位置が影響していることもあるのだらうと思います。ちなみに、多額に及ぶ遷宮費用も、戦前は国費によって調達されていました。これらの違いは、明らかに戦後、国家神道を否定した連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の神道指令によるものでしょう。

今日、遷宮費用の調達は、財団法人神宮式年遷宮奉賛会という募財機関が設立され、天皇陛下の大御心（おおみこころ）に、国民が浄財をもってお応えする姿に変わりました。これはこれで多くのご苦勞はありましようが、戦前に比べ、伊勢神宮が国民により近いご存在になったことを喜ぶべきでありましよう。

祭祀王にして国家元首たる天皇

改めて考えて見ますと、日本神話に起源をもつ皇室が、他国の王家と全く違って、統治とか支配に関与しない祭祀王（PRIEST KING）の役割を長く果たしてきたことは、特筆すべき事柄です。

宮中三殿で、日々、天皇陛下がお一人でなされる祭祀は、「祈り」そのものです。一年三百六十五日、陛下が祈られることは、常に国家の安泰と発展、国民生活の安寧と幸福、そして世界の平和の三つとって過言ではありません。

私たち日本人にとって、気高く、慈しみ深く、思慮に富み、無私の祈りに専

念され、政治権力を超越する「国家元首」を「象徴」として戴いていることは何と素晴らしいことでしょうか。その素晴らしさは、近隣諸国の有り様をちょっとでも眺めれば、誰でもすぐに分かることです。

もとより、現憲法では、天皇陛下が国家元首であるとはっきり書いていません。憲法改正については賛否いろいろありますが、敗戦後七十年近く、未だに占領国が押しつけた憲法を「平和憲法」と称して、後生大事に有り難がっている国は日本だけでしょう。少なくとも、わが国の国柄を「天皇を国家元首とする自由主義、民主主義の道義国家」であることを明文化する新憲法を、一日でも早く制定すべきであります。

庶民が深く関わる式年遷宮

式年遷宮でもう一つ感じたことは、庶民が、この二十年に一度の国家的大事業に深く関わっていることです。

式年遷宮は、ほぼ八年の歳月をかけ、約三十の祭事と行事で構成されるそうですが、その中で「御木曳初式（おきひきぞめしき）」や「お白石持（おしらいしもち）行事」のように、地元伊勢市民はもとより、全国の庶民が神領民という資格をいただき、素直な敬慕と、喜びと、感謝の思いで自発的に行事に参加しています。

実は、七月に行われたお白石持行事に、私自身も宮城縣護國神社の責任役員総代として参加する予定でしたが、参議院選挙の直後で体調を崩し、やむなく不参加となってしまいました。しかし、参加した友人から「暑くて大変だったけど、お白石を奉曳車で運び、新宮の御敷地内に一つ一つ敷き納めることができ、大感激でした」と聞き、長く人々に愛されてきた所以を感じた次第でした。

伊勢神宮を参拝する「お伊勢参り」は、古くから日本人が熱中することの一つでした。特に江戸時代には、「入鉄砲 出女」のように、それぞれの藩の領民、とりわけ女性が、他藩に自由に出入りすることは厳しく制限されていましたが、「お伊勢参り」だけは別格で、老若男女がそれと判る扮装であれば、たとえ路銀にこと欠いても、道中、喜捨をいただきながらお伊勢参りが出来た、と言われています。

世界各国に聖地巡礼は数多くありますが、定期的に数十年に一度ずつ、御社（おやしろ）や神殿そのものを忠実に建て直し、伝承と再生を繰り返していく

という特徴を有する事例は、伊勢神宮と出雲大社（六十年に一度、大遷宮）及び春日大社（二十年に一度、ご遷造）など極めて稀れです。

天武天皇、持統天皇の並々ならぬ創意と決断

午後八時半近く、遷御の儀が滞りなく終了したことが告げられ、三時間を超す緊張から解き放たれた三千人の奉拝者が、それぞれ深い感慨にひたりながら帰路につきました。二十年後、日本社会がどのように変わろうとも、次回の式年遷宮はこれまでと寸分の違いなく肅粛と斎行されることでしょう。

変えること、変わることが改革や進歩に不可欠の前提条件であり、それは進化の必然性にも合致するのだとすれば、行く川の水の流れの如く、同じように見えても止まることのない無常さもまた自然界の摂理であるとする賢者の言葉は、強い説得力を持ちます。

では、式年遷宮は、変わるべき、または変わらざるを得ない状況をあえて人工的に再興し、永らえようとする反自然的な営みなののでしょうか。とてもそのようには考えられません。それは、太古と変わらぬ伊勢の山々や、清楚な五十鈴川の流れと共にある神宮の神域を一度でも体感すれば、先人の方々の意図にそのような考えがあろう筈がないことが確信できます。

冒頭に述べたように、式年遷宮の儀式を定め、かつ、国家最大の重儀として実践に移されたのは、天武天皇と持統天皇の御世です。わが国には、法隆寺のように世界最古の木造建築が残されていますが、伊勢神宮を修理 修繕の方法ではなく、何故、巨額の費用をかけ、およそ二十年ごとの建替えを繰返していくことにしたのか、神宮にも記録がないため、明確な理由は分かっておりません。

推量される主な理由としては、過去の建築様式である弥生式社殿を保存するために、建築技術の伝承を図ろうとしたのではないか、あるいは神道の精神である常若（とこわか）を求め、清浄で生命力あふれる御社であるべきと考えたのではないか等が挙げられているようです。

しかし、これらは天武、持統両天皇の並々ならぬ創意と決断に窺える目的理由よりも、手段 方法に重点を置く見方ではないだろうかと考えます。

自然界の摂理と式年遷宮の意義

再三述べてきたように、伊勢神宮は皇祖神である天照大神がおわします畏れ多い場所です。飛鳥時代、壬申の乱を経て大和政権の確立と律令国家の完成を図っていった両帝が、統治の諸課題を解決するに際して、忌み、穢（けがれ）、禍事（まがごと）を排し、御神託による全き道を指し示していただく対象が皇祖神でした。当時の遷都地である新益京（あらしのみやこ。のちの藤原京）が、伊勢神宮とともに北緯 34 度線のやや上にあり、神宮が都から見てほぼぴったり真東に位置していたことは、決して偶然ではないと思います。

とすれば、二十年に一度、二つの正宮の正殿を始め数多くの社殿や装束 神宝を一斉に造り替える意義は、座ししたもうところの大神への至高の崇敬と畏怖を表すことに他なりません。神道の惟神（かむながら）の精神、神人合一の精神から言えば、遠祖神の御霊（みたま）は、過去も未来もなく、遠近の差別もない言霊（ことたま）となって、常に現在地におわします。二十年ごとにそのお住まいを改めるということは、おのずから、祈りと対話の場所をより清々しく、より神聖な状態に回帰するために「循環」という方法を取り入れることで、神宮の永続性を確保する意図があったのではないのでしょうか。

太陽を中心に回る惑星の運行はもとより、潮汐 昼夜 季節 血流など循環は自然界の主要な法則の一つであり、大乘仏教の輪廻転生、キリスト教の復活、チベット仏教の化身ラマなど、宗教上の象徴としても多く現れます。循環がもたらすものは、再生 回復 安定であり、途絶えることのない繰り返しによって、いのちを繋いでいく行為でもあります。

天武、持統両天皇が式年遷宮に籠められた思いは、皇祖神が嚴魂（いずのみたま）幸魂（さきみたま）となって幾久しく豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみ）ずほのくに、日本をいう）の平穏と繁栄に、御神力（みちから）を賜らんことをかしこみ、かしこみ祈られたことに尽きるでしょう。

おわりに

天武 持統両天皇の壮大な意図は、千三百年に及び、今日に至っております。連綿と守られてきた伝統としきたり、世界に類例のない伝承と循環のユニークさ、細部にわたって伝統儀式を墨守してきた神職ら、自然と共生する神宮のたたずまい、国家国民のためにひたすらお祈りされる祭祀王、浄財の勧募完遂に率先して協力する多くの国民と団体 企業、そして行事参加に率直な敬慕と、

喜びと、感謝の思いを籠める庶民の心意気。これら全てが見事に融合して、式年遷宮をかたち作っているように思います。

そこに、時空を超え、日本人の「和の精神」が結実しているように感じられてなりません。

(了)